

活動の場所

京都府京都市嵯峨野地区（竹林）



活動目的

京都嵯峨野は、日本三大美竹林に指定されているとおり、竹林が美しく有名な場所です。また、嵯峨野地区は歴史的風土特別保存地区に指定されている通り、嵯峨野一帯が美しい景観を次世代に残すべき法律で指定された場所でもあります。しかし、高齢化、担い手不足などの影響から竹林管理が行われなくなり、荒廃竹林となっているのが現状です。しかし、嵯峨野は希少種のホットスポットでもあり、ホンゴウソウ、ヒナノシャクジョウ、シロシャクジョウなど京都府絶滅寸前種といわれる種が数多く生育しています。こういった希少種の生育環境は開空率との関連性が深いと言われており（広島大学）、京都嵯峨野の竹林管理の在り方と生物多様性保全のあり方について活動を行っています。

活動内容

私たちの活動は、放置竹林の竹林再生を行い、京都嵯峨野の景観の質の向上を図りながら、希少種の生育環境を保全する活動展開を行っています。

京都嵯峨野の竹林にはホンゴウソウ、ヒナノシャクジョウ、シロシャクジョウといった京都府絶滅寸前種（京都府RDB）に指定されている腐生植物（以下、希少種）が数多く生育していることが特徴です。しかし、放置竹林が急激に広がりつつある今、希少種の生育環境も含めた保全対策が急務となっています。

これら腐生植物は光合成をしないものの、竹林の密度との関係性が深く、天空の開空率が25%前後が生育環境として適していると言われています（出典：小倉山歴史的風土特別保存地区森林再生工事に係る調査・計画業務）。

また、竹林の整備方法には、竹林経営（100平米あたり30本程度）、景観竹林（100平米あたり50本程度）等の方法があります。実は、先に述べた開空率が25%前後というのは景観竹林に近い密度管理となります。

全国的な課題でもありますが、ここ嵯峨野でも筍掘をする農家さんが減少し、放置竹林が多く見られます。足の踏み場もない程、枯竹、倒竹が見られ、景観や生物多様性の低下、つまり、希少種の生育環境も悪化しています。竹林経営として密度管理は100平米あたり30本程度にすることで、その密度にするには大変な労力がかかります。大規模な竹林再生を目指すには、労力軽減の目的から景観竹林整備へと誘導することが効果的で、その密度管理が希少種保全に繋がるのではないかと考えており、竹林再生活動と調査研究を重ねています



左から：竹林整備の様子、ホンゴウソウ、重要種生育地のマーキング（モニタリング調査）

PRしたいポイント

竹林再生を進めていく過程で多くの伐採竹が発生します。その竹を放置すると竹は分解が遅いことから集積竹が長い間残ります。景観的にも林床に生育する希少種保全という観点からも搬出し、活用方法を検討する必要があります。

特に、嵯峨野地区は歴史的風土特別保存地区に指定されている地域で稲穂たなびく景観を守る地域です。こういった歴史的景観的価値と希少種の生育環境を守るべく、管理と搬出、利活用のサイクルを構築していくことが必要な地域です。

伐採竹の活用の一つとして、竹の桿の部分をチップ化し、約1年間発酵肥料とします。

また、竹の葉の部分は、京都市動物園の象の飼料として提供し、象糞堆肥の有機質肥料とします。この2つの肥料を嵯峨野の水稲肥料として与え、米作りに活用しています。

もう1つの活用として竹林を再生するにつれ、筍が発生するようになります。竹林経営のもと、土入れをした環境から生えた柔らかい筍とは違い、少し歯応えのある旨味のある筍が景観竹林では取れるようになります。この味の良い歯応えのある筍を使って筍に合うカレーを製作しています。「京都缶*環づめプロジェクト」として販売を行っており、1缶販売ごとに50円を環境保全活動に役立てる取り組みとしたプロジェクトです。ここでは資金の使い道を循環させています。このように環境保全の取り組みを進めていく上で、農林業との関わりから経済を少しでも回すことが、持続可能で循環的な京都の竹林再生に繋がるよう取り組みを行いながら、景観再生、重要保全といった生物多様性保全の活動を行っています。



左から：竹のチップ化の様子（地元小学生の環境教育活動として）、チップ化した肥料の水田への施肥、竹林再生地の筍を使った筍カレー

活動効果、今後の展開 等

放置竹林再生面積が約3haと広がりを見せています。それとともに明るくなった環境では希少種（ホンゴウソウ、ヒナノシャクジョウ、シロシャクジョウ）の個体数が増加していると考えられますが、まだまだ竹林管理と希少種保全のあり方についてはデータを蓄積していく必要があります。

引き続き、竹林管理と希少種保全の調査を実施していきます。また、放置竹林の竹林再生面積を増やしつつ、1次産業の活性化も行き、持続可能な循環的モデルづくりも引き続きを行います。

また、こういった持続可能な活動展開と一緒に活動できるパートナー（企業）を募集し、我々だけでは出来ない活動地面積（竹林再生面積）の拡大を行います。